



秋田県聴覚・言語障害教育研究会OB会
平成15年度 会報 第1号 平成15年7月発行

標題の「書」、秋田県ことばを育てる親の会
会長 辻 久視 先生
命名者 OB会事務局長 遠藤昌夫先生

「潭」とは淵の深さを表す言葉。
「潭 潭」は、澄み切った心の姿を表現する。
禅語に「月は 潭底を穿ちて水に痕なし」という
言葉がある。
意味は、「無心の水月が、**潭**に映じて然も
全く痕跡を残さぬ悟人の心境」を言う。
《親の会会長 辻 久視先生》

〈挨拶〉

「OB会の存続と財源」

秋田県聴覚・言語障害教育研究会
OB会 会長 伊 藤 薫

今年も7月に入りましたが、会員の皆さんいかがおすごしでしょうか。
さて、本年度の総会は6月2日、中通小学校で行われましたが、時間不足から後日役員会を開き、次のような点について話し合いました。

- 1 本会設立以来、充実した活動を展開してきましたが、現実と会則にギャップを生じてきたことから、会則の検討をいたしました。
 - 2 事務内容の分離についてであります。本年度は中央地区が当番ですが、諸般の事情によりOB会報の発行については、山田、梅田両先生(北地区)にお願いし、それ以外の事務全般を進藤先生(大住小)から担当していただくことになりました。
 - 3 運用面での改善であります。総会前には役員会を開きガソリン代位の補助をすることや、仲間が他界した時の弔意の在り方等について意見が出され、今後これらの点について考慮することになりました。
- 以上主な点について述べましたが、本会は現職教育への支援団体という性格から、財源の確保が大きな課題であります。

その課題解決には会員の増員も必要ですが何よりも大事なことは、会費の納入であります。障害児教育が今後「特別支援教育」という体制のもとに、大改革がされる中でのOB会の存続意義をご理解いただき、これまで以上のご協力をお願いします。

《挨拶》 「OB友の目指すもの」

秋田県ことばを育てる親の会 会長 辻 久 視

正岡子規は、自分の友を数えながら、その友とのなすべき事を見つめる時があって、友との種類を「愛友、良友、好友、敬友、益友、旧友、敵友、親友、文友、畏友、温友、郷友、直友、酒友」など二十ほどに分類していき、交際範囲の広さもさることながら、友とは何ぞや、と考えてしまいました。

ところで「聴覚・言語障害児教育研究会OB会」とは友の分類で言うなら、「究友」とでも名付けたらよいのか、あまり堅く考えず「共友」とでもしておいた方がよいのか、要はOB会に入会する気持ちの問題と、更に理想的に言えば、“現職時代に得た技術や考えを社会に尽くせたら”とする心があれば、最高の人材の集まりとなるわけで、そうすると「心友」と言うにふさわしい会員となるのでしょうか。“名は体を表す”と言いますから、このOB会の性格そのものを意味する名になります。そうあってほしいと思うばかりに、先般の役員会にたまたま参席して、話題の中からふと思ったことでした。

さて話は別で、全国言語障害児をもつ親の会の本年度全国大会が北海道小樽で、八月二日～三日に行われますが、その席上、秋田の山田芳男、遠藤昌夫、両先生が「この教育と親の会の為に尽くされた功績」により感謝状を受けることになりました。おめでとうございます。

平成15年度 秋田県聴覚・言語障害教育研究会 OB会総会並びに役員会の報告

平成15年6月2日、秋田市立中通小学校を会場にしてOB会総会が開催されました。昨年度の会務報告、決算報告があり、続いて今年度の事業計画、予算案の審議がなされました。このことにつきましては事務担当から別冊で送付されます。

総会終了後講演会が開かれました。講師は全国言語障害児をもつ親の会事務局長、野木 孝先生でした。今後の言語障害児教育の展望、新規事業としての特別支援教育の在り方等、新しい制度の導入による障害児教育への影響について話されました。詳しい内容は、別紙「平成15年度全国代表者会議基調報告」をご参照下さい。

同年6月11日、同会場でOB会役員会を開催しました。協議事項として次のことが話されました。

- ① 会則の不備な点の改正について。
 - ② 1泊研修会の人的交流について。
 - ③ 慶弔費、旅費等の予算について。
 - ④ OB会事務局(事務局長、事務担当)について
 - ⑤ 会報発行について
 - ⑥ 顧問等について
- 詳しいことは事務局から連絡があります。



第20回全国言語障害児をもつ親の会全国大会 小樽大会
～親の会全国・北海道創立40周年記念大会～

平成15年度標記親の会全国大会が小樽で開催されます。概要は次の通りです

- (1) 期 日 平成15年8月2日(土)～3日(日)
- (2) 会 場 1日目 小樽市民センター (開会式、全体会、講演会)
2日目 小樽市立稲穂小学校 (分科会、閉会式)
- (3) 講演会
演 題 「親と子のきずなと思いやりの心」
講 師 長 尾 章 郎さん(札幌市円山動物園協会動物科学館 館長)
- (4) 分科会
第1分科会 親の会の役割と活動
第2分科会 ことばの教室をとりまく環境
① 通級指導の実際と取り組み
② 幼児の指導の場を求めて
第3分科会 子育てアラカルト
第4分科会
① ことばの発達 ② 発音 ③ 吃音 ④ 耳のきこえ ⑤ 口蓋裂
⑥ コミュニケーションの問題を抱えて 以上

第31回

秋田県聴覚・言語障害教育研究大会開催

平成15年度標記 聴・言・研大会が下記の通り開催されます。
概要は次の通りです。

- 1 期 日 平成15年8月19日(火)～20日(水)
- 2 会 場 第1日目 秋田県教育会館
第2日目 千秋会館
- 3 日程及び内容
(1) 8月19日 《開会行事》
《分科会》 ① 構音障害 ② 言語発達遅滞 ③ 難聴
《講演》 演題 「特別支援教育と通級指導教室」
講 師 秋田大学教育文化学部助教授 武 田 篤
(2) 8月20日
《講演》 演題 「軽度発達障害児の周辺(LD、ADHD)も含めて」
講 師 仙南東小学校校長 石 山 憲 二
《分科会講話》 ① 言語障害部会 ② 難聴部会 ③ 学校経営部会
以上 お知らせまで。



菜の花や
月は東に 日は西に
与謝蕪村

東の野に炎の立つ見えて
返り見すれば月傾きぬ
柿本人麻呂

この二つの句と歌は、ともに典型的な日本の春の景観を詠んだものの秀逸として学校で教わった。作者も文学史上余りにも著名な蕪村、人麻呂であることからそのことは私にも率直に受け入れられた。

万葉集はすべて「万葉仮名」で表記されている。この人麻呂の歌を岩波古典文学大系・「万葉集」所収の表記に従うと次のようになる。

東野炎
立所見而
反見為者
月西渡

漢字の表記は私が当用漢字に直したが、校本万葉も、使われ現在の字には異同が無い。

2003

だけで原本がないし、その写本もまた多様であるので、ひとつの歌に複数の表記が残されるということもしばしばある。しかし、万葉仮名の表記では異同が無いこの歌であるが、その「読み(訓じ)」方となる諸説がある。

「アヅマノノ ケフリノタテル トコロミテ カヘリミ スレハ ツキカタフキヌ」
(校本万葉集)

「東(ひむがし)の野に炎(かぎろひ)の立つ見えてかへり見すれば月傾(かたぶ)きぬ」
(岩波古典)

「東(ひむがし)の野にはかぎろひ立つ見えてかへり見すれば月西渡(つきにしわたる)」
(万葉集釈注・伊藤博)

一首の歌の世界は、その語はもちろんだ区切り方ひとつでも大きく変わる。したがって、そ

の本文をどのように読(訓)むかは万葉集に限らず古典研究の上では大事なことである。

ところで、冒頭に掲げたこの句と歌はまさに好一對である。まるで、絵に描いたようである。蕪村の句では、月が東で日は西である。

人麻呂の歌では、月は西で、日は東である。わが国の自然の景観を詠じた和やかさがにじんでいる。

万葉集のよと梅田信彦

しかし、昭和三十九年の夏、私に革命的なできごとが起こった。それは、一冊の文庫本から始まった。忘れもしない。その日もいつもの書店に立ち寄った。新着の本の棚に一冊の文庫本が目についた。

「万葉の旅(上) 大和・大養孝著・現代教養文庫」
私は何気なくこの本を手にとって、目次を開いて、ふと頭に浮かんだこの人麻呂の歌を捜し

た。それは、百四十八頁にあった。『・(人麻呂の)この歌は、山野の草枕での(今は亡き草壁皇子の)回想に夜を徹してしまった荒涼と寒気と懐愴の黎明の感慨として理解されなければならぬ。よくこの歌の評釈に蕪村の「菜の花や月は東に日は西に」があげられているが、季節と時刻を異にしているだけでなく、うたわれた世界も、環境もまったく別物である』

大養はこの人麻呂の一行が、ここ安曇野を訪れたのは、持統六年十一月十七日と推定している。太陽暦では、十二月三十一日である。時刻は未明である。大養は、この日、この時刻に実際にこの宇陀の大野の地を訪れている。しかし、その光景は同じように引き合いに出される蕪村の句のそれとは余りにもか

あ離れたものと主張する。あの時の頬の紅潮を私は今でも覚えていた。

ことばの教室の担当が決まって「封印」した万葉集の資料を目の前にしながら、今、あと何年生きられるか知れないが、四千五百余首を校訂して「梅田万葉」でも作って見ようかと昼寝をしながら考えている。

《近況報告》「サテライト教室の支援」

秋田市 石井 辰徳

難聴児の地元小中学校への就学が更に進み、本年度の難聴学級数は、小学校14、中学校6、計20学級になった。そして、聾学校の児童生徒数は、ついに40名を割った。

こうした状況への対応策の一つとして聾学校に難聴教育のセンター的機能を果たすことが求められ県内2カ所に聾学校のサテライト教室が開設された。鷹巣小学校内と角館西小学校内である。現在定期的に通級しているのは、鷹巣小学校に幼児児童7名、角館西小学校に4名。その他、不定期の通級や突然の相談などがあり、これからも増えそうである。需要が多いだけに、このサテライト教室の開設の意義は大きい。

私もこの活動を支援すべく、火曜日は鷹巣、木曜日は角館に出張ということが多く、難聴でありながら未だ適切な指導を受けていない子供についての情報がありましたら、ご一報いただければと思います。

続 仏像を彫る

本荘市笹道 遠藤 昌夫
(平成14年度会報第4号続き)

去年の今頃、身の丈一尺五寸～一尺五寸五分の四天王(持国天・広目天・増長天・多聞天)四方(東西南北)を守る護法神を完成させた。材質は、柃の木です。これが木肌は抜群ですが、少し切れ味の悪い 鑿 ですと純目逆目にかかわらずむしれてきますのでイライラする気持ちを押さえながら彫り進めるのです。

更に、一尺×七寸×二尺の角材を鋸と 鑿 だけでお姿を削り出す一本造りなので、それも四体となればどんなに難儀なことなのかお分かり頂けるとおもいます。「なんでこんなにまでして」とほうり出したり、そうっとご機嫌をうかがったり、曲がり尺をあてて確認したり、遠目、近目、斜め目で眺めほれ直したり、非汗を流してみたり、時には血を流したりと結構人生そのものなんです。

今は、庭の見える座敷に安置しておりますが私の安らぎの源になっております。

四天王を完成させて間もなく長年の夢でした阿修羅像を彫る決心をしました。

玄関の脇に五尺三寸ほどの檜 一本造り 毘沙門天 が安置されております。今から三十年ほど前、象潟の製材所でその 檜 と出会いました。

根元部の太いところで座禅堂に安置する僧形文殊菩薩を彫りあげました。それは、今、本荘市の永泉寺に納めました。柱目六尺部で毘沙門天を製作するための製材のおり生まれたのが六尺×二寸五分×二尺の立派な板材です。「これを彫らずして死すことあらば妻に申し訳たらず」。なにしろ、この櫓の値段が三十万円ですし、買うにあたって一言の不平も言わなかったことを重く受け止めていましたから。

初めて板状寄木で阿修羅像を製作することにいたしました。

(次号へつづく)

ローマ字入力

河辺町 高橋 恒治

退職まで後二年を切った今、若さを保ち、頭脳も古くならないように・・・などと考えてることが多くなった。

4月、転勤を機会にある挑戦をして3カ月になった。その挑戦とは、パソコンキーボードのローマ字入力である。カナ入力でも文章だけであれば特に不便はないが、インターネット時代ではいささか支障がある。

挑戦してみて、確かにローマ字入力は、数字、アルファベットを切り替えせずに打ち込めて、ネット時代に合致している。ただ、日本語ではキーをたたく回数が多くなった。たたく回数が多いのは指の運動、頭脳の活性化にとってはメリットかもしれない。慣れないこととあいまって入力のスピードは落ちた。文章を打ち込むのであればカナ入力がやはりベターである。

今、特殊教育の改革が進められている。カナ入力とローマ字入力の両刀使いは私にとって小さいが大きな改革である。

保育参観して感じたこと

北秋田郡合川町 松橋 英雄

保育を取り巻く環境は、一層多様化、複雑化し変換期を迎えようとする社会情勢である。各施設、子どもたちが元気に安心して活動できるようにと創意工夫した特色ある保育に取り組んでいる。

今まで保育参観して各施設共通して強く感じたことは、

- ① 周辺的环境や地域性を生かした保育をしている。
- ② 個々の特性や能力を十分発揮できるように配慮した保育をしている。保育者の適切な支援、友だち同士の協力や工夫によって「遊び」がどんどん発展していく。
- ③ 職場は忙しいが「明るい」。家庭的雰囲気が漂っている。従って子どもたちは安心して活動できる源となっているのではないか。
- ④ 0歳児からの保育、子どもたち同士や保育者との関わり合いから対人

- 関係を強化していくなど「心の教育」の原点になるのではないか。
- ⑤ 子どもたちが生き生きした自信に満ちた表情で活動している姿や年長組が年少組を世話したり教えてあげる姿から微笑えましい光景が見られ「心情」が自然に育成されているのではないか。
- 厳しい保育現場ではあるが、子どもたちの「発想」や「意欲」を認めてあげ「心のつながり」を深めながら、子どもたちの健やかな成長のためにさらに頑張りたいと願いながら、保育参観して感じたことの一部を綴らせていただきました。

千秋公園の一角「明德小」より「どじょっこふなっこ」発祥の地
「金足西小」へ

秋田市 石川 勲

♪ はるになれば しがこもとけて どじょっこだの ふなっこだの
よるがあけたとおもうべな ♪ 有名な「どじょっこふなっこ」の歌
は、金足西小学校でできました。

この4月、本校に校長として赴任し、3カ月が過ぎたところです。秋田市の北端に位置し、日本有数の自然に恵まれた学校で、子供たちは目をきらきら輝かせて学習しています。

先日、地域の方も一緒になって「どじょっこ ふなっこの歌を楽しむ集い」が開催されました。体育館に響きわたる歌声は発祥の里にふさわしいものでした。

今後とも、この歌を絆に、保護者、地域と一体となって子供たちを育てていきたいと思っています。

前庭には、歌碑もあります。是非お立ち寄りください。(国道7号線沿い、土崎から能代に向かい、追分三叉路・追分駅・追分跨線橋を過ぎると大きな学校案内板があります。)

言語障害教育が特別支援教育を
リードできるか

秋田市 伊藤 正敏

6月2日、本校(秋田市立中通小学校)でOB会の総会がありました。総会後にも、本校で役員会がありました。私は役員の大先輩の方々がいつまでもお元気で、真剣にこの教育のことを語り、心配する場に参加できることをいつもうれしく思っています。また総会と一泊研の年2回、自分で勝手に仲間と思っている先生方にお会いするのも楽しみです。いつまでも言語障害教育に関わっているのはこんな大先輩と仲間にお会いできるからです。6月11日のOB会の役員会で辻久視先生が「今後の特別支援教育の在り方について(最終報告)」の資料を持参し、今後の方向について話さ

れました。特殊教育から特別支援教育へと言葉だけでなく、制度が変わろうとしています。一番遅れているのが現場の担当者であってはいけないと思います。大きく変わる時こそ夢を語り合える時ではないでしょうか。大変だと感じるより楽しくなりそうです。言語障害教育はやっぱりやめられません。

《回想記》

M子さん

能代市 山田 芳男

M子さんは口蓋裂で中学1年生です。昭和42年5月の入級です。中学校の学習が終わってから通級してきますから午後4時半～5時頃からの治療になります。ところが、教室に来て一言も言葉を発しません。毎日の沈黙です。沈黙が長く続くと治療者側が辛くて耐えられなくなります。焦そう感や疲れも出てイライラしてきます。3カ月も沈黙が続くともう限界です。「治療を中止するかな？」と思いました。「だが待てよ！。この子は声も出さない、何にもしないが、時間になると1日も休まず必ず教室にきて座っているぞ。これはまたすごい執念だな。」と思い始めました。そのうちに、M子さんの黙した行動に畏敬の念すら抱くようになっていました。

「これは相手を変えようとするより、自分の考えを変えたほうがよさそうだ。」と気づき始めました。「よし、言葉を治してやるなどというおこがましい考えはやめて、本人自身治そうとする気持ちが起こるまで、とことん付き合ってみるか。」と気持ちを切り替えました。その旨を本人にも伝えました。それからは、言葉のことには特にふれませんでした。

11月末でした。突然「私、練習する。」と言ったのです。それからというもの何かにつかれたように訓練に励んだのです。5月から11月まで6カ月の長い時間の沈黙でした。しかし、このことは「耐えて待つ」ことの大切さ、「沈黙の価値」という、貴重な教えを私に残してくれました。

言語治療は時間のかかる仕事です。セラピストはこの長い時間 辛抱強く最後までとことん子供に付き合っていこうとする強い精神力が必要になりそうです。

M子さんは学校卒業後、日本歯科大学付属病院で歯科衛生士として活躍しています。

《折々のうたより》

風鈴に 風がことばをおしえてる

安齊 絵里香

【17音の青春】所収

イラスト
梅田信彦氏



紹介

秋田県には、言語障害児教育を支援するため、他の県にはない独自の組織があります。それが言語障害児教育推進協議会です。ここでは、この会が設立した当初から当会に尽力してきた理事の遠藤昌夫先生に、当会の生い立ちや働きなどを紹介してもらいました。

「言語障害児教育推進協議会について・・・」

言障協理事 遠藤 昌夫

昭和41～2年の頃、言語障害児教育の必要性が強いうねりのように全国に広がりつつありました。我が県においても、辻 久視先生を中心に大きなうねりが起こり、旭南小、能代湊城二小、横手朝倉小にことばの教室が設置されたのもこの頃です。それを支える組織は県教委と、秋田県ことばの教室親の会の二組織で特に親の会は大きな力になりました。

しかし、親の会設立のときからも、いろいろな研修機会の時も、言語障害未就学児に対する措置の問題が未解決だったし、義務教育機関と地域福祉と医療機関との連携のまたとないよい機会だと、論議されていました。

いかに、ことばの教室を知らせるか、いかに、活用してもらうか、社会福祉や医療機関、幼保育機関、報道機関との連絡提携を推し進めていくのか。また、それをコーディネートする機関をどうするのか。という問題点が立ち塞がっていました。

昭和43年に入って、ことばの教室経営に関する悩み事を話しあう情熱の仲間・・・の秋田 故 能美先生、能代 山田・梅田両先生、横手の小松先生、県内留学中の秋山先生、それに私と、・・・本当によく集まりました。その都度といってもいい程、毎回のように辻先生や、「たんたん」4号に載せた故石井先生が同席して下さいました。温厚で、実にうまそうにお酒をすすり面白そうに話を聞き、会話に参加してくれました。その中の一つが先に述べたコーディネートする機関だったのです。

お二人は私達の願いをじっと聞いて下さったが聞き終えて、目を見交わした後、いとも簡単に「それは非やりましょう」ということになったのです。それが秋田県言語障害児推進協議会になったのです。

ぐずぐずしている暇はありませんでした。すぐに趣意書を書き、発起人会を立ちあげ、宛名リストをつくり、会則、会計予算と入会の説得、設立総会の日取りと会場などなど、相談決定をしていきました。

昭和43年11月4日、設立総会の会場は確か旭南小学校旧校舎だったと思います。普通教室よりは少々大きめの会場だったと記憶してしております。その趣旨に賛同してくれた団体の代表の方々と個人の方々がたくさん集まり、会場は溢れんばかりであったことを覚えております。

初代会長は石井興太郎先生です。

言障協(言語障害児教育推進協議会の略)の会則第3条(目的)に、この会

は言語障害児教育を推進し、言語治療の研究の推進を図るとともに、言語障害児の幸福をまもるため社会的啓蒙を図ることを目的とする。とうたわれております。

また第4条(事業内容)には、

- 1 言語治療教育推進のための諸問題検討
- 2 言語障害児の福祉のための社会的啓蒙
- 3 特殊教育に関連する諸団体との連携、提携
- 4 その他、この会の目的達成に必要な事業とあります。

実際には、地域毎に言語障害児の選別検査を実施して、その実態を把握してから教育委員会に教室増設や、ことばの教室の担当者の研修・各地方教育委員会への陳情をしました。

また、医師会や保健機関で幼児のことばの選別検査の実施の陳情、口蓋破裂や難聴等の検査治療の情報交換、新入学児童へのことばの選別検査の実施、研究会への研究費助成などなど、十指にあまるほどお世話になっている機関なのです。

簡単に説明すれば、私達ことばの教室の担当者では、解決できない事柄等を、会議によって吸収しうまく導いてくれる会でした。

そして……

故石井先生と、現 親の会会長 辻先生が私達と話し合うため通ったあの湯豆腐のようなあたたかな会がこの会だと思っております。

《挨拶》 OB会事務局から一言

秋田市立大住小学校 進藤路子

今年度、OB会事務局を担当させていただくことになりました。縁あって難・言教育にかかわって今年で10年目になります。節目の年に諸先輩の先生方のお手伝いをすることになり十分な仕事ができるかどうか不安もありますが、何とか役目を果たしていきたいと思っております。

「21世紀の特殊教育の在り方について」の最終報告にあるように、一人一人のニーズに応じた特別な支援の在り方が少しずつ具体化されようとしています。特殊教育が特別支援教育と名称が変わり、乳幼児期から卒業後まで相談、支援を行う体制を整備するということは、これまで、養護学校 特殊学級、通級指導教室という特別な場の教育に頼りきってきた教育現場に発想の転換をせまるものです。

特別支援教育は今後の5年間で大きく変わっていくだろうと思いますが、難・言教育の果たす役割は大きいだろうと、期待しながら、教育の大きなうねりを感じている今日この頃です。

《編集 文責 山田》





秋田県聴覚・言語障害教育研究会OB会
平成15年度OB会会報第2号平成15年9月発行

《折々のうた》 ～ 秋 ～

秋も秋 こよひもこよひ 月も月
ところもところ みる きみもきみ
—よみ人しらず—【後拾遺集】

秋まつり 子消し人形 川に捨て
—寺山 修司—【花粉航海】(昭50)

しぶ柿の しづかに秋を送りけり
—桜井 吏登—【吏登句集】

《挨拶》

「阪神優勝」と「特別支援」と

OB会 副会長 梅田 信彦

著作権とか、特許権とか言われます。日常的にはカラオケで支払う
料金という形で私達にも間接体験ができます。

でも、今回の「阪神優勝」騒動にはイヤな気配がします。歌詞などと違っ
て、これは「言語」そのものに近いからです。

自由に使えるはずの言語が、一個人の所有となって、投機の対象にもな
るということには違和感があります。

コミュニケーションの大前提が無視されていると思うのです。時代の流れ
でしょうか。

政治の潮流でしょうか。構造改革の一端でしょうか。「特別支援教育」が
スタートします。

この頃「障害」の考え方が機能中心的になっているように思えるのです。

現在、言語障害を病院の外来で扱っているところがあります。この場合
学校と病院とで実際にどんな違いがあるのでしょうか。

「特別支援」という言葉の中にどんな意味があるのか分かりませんが、「障
害児」ということで一括りにせず、障害も健常もない、「人間」という共
通の土台に立って考えたいものです。子どもは実験台ではないし、教育は
予見だけでは語れないものですから。

1



第20回

全国言語障害児をもつ親の会
全国大会・小樽大会（報告）

第20回の標記全国大会が平成15年8月2日(土)《午後1時》～3日(日)小樽市民センターで開催されました。親の会会長の辻久視先生から、この会に出席するようにとのお話があり、遠藤昌夫先生、梅田信彦先生と3人参加させていただきました。ここでは、その全国大会の雰囲気、様子、概要等を報告したいと思います。まず、記念誌に辻会長が特別寄稿を寄せていますのでその全文を載せます。これを読みますと秋田県で「ことばの教室」を初めて設置した当時、どのようにして親の会ができ、どのようにして教室ができたかの全国的な動き、あるいは社会状況がよくわかります。

(山田)

《特別寄稿》

親の会と共に歩んだ40年

全国言語障害児をもつ親の会 顧問

秋田県ことばを育てる親の会 会長

辻 久 視

今年、二度目の全国親の会の大会が北海道担当で小樽に於いて行われることとなり、感無量の気持ちで一杯です。

思い返せば、今から40年前仙台通町小学校の浜崎先生を訪ね、この教育のなんたるかを考え、学校教育の中でどうあることが望ましいのかを思うようになって以来、同じ悩みを持つ親達と巡り会うことで、親の会の運動が始まりました。特に千葉院内小で大熊先生と会い、その帰りがけに平岡さんと会ったことが昭和39年8月18日の第1回全国大会の開催となったのでした。

当時日本広しと言えど、このことに気付きこの言語障害児なるものを、自分の教育の場で、若しくは自宅に於いて自己の教育的手法をもって言語障害児の治療に当たっていたのが仙台市の浜崎健治先生と千葉の大熊喜代松先生のお二人で、驚いたことにその「スタート時期」も「教室親の会結成時期」も「校内外の生徒の受け入れ」も「各県からの研修教員の受け入れ」も非常に非常によく似ていました。ただこのお二人の教育方法が違っていた為、どちらがどうなのかといった見解が、千葉方式とか仙台方式といった話題を呼びましたが、要するに両先生の教育的手法の違いに依るのであって、浜崎先生の場合、専門の国語音声学の立場からタマタマ東北のなまり音の矯正から障害児の音声発声教育へと行きつくわけで、大熊先生の読みの治療、どもりの子に対する人間観の対応によって生み出さ

れた言語障害教育の草創となったものと考えています。

ところで、この教育が親の会創立の翌40年以降全国的に「ことばの教室設置、教員の養成」へと親の会の大運動が展開されていきました。お陰で特別法の改正によらず文部省も地方教育委員会も、従来無かった「ことばの教室」なるものを増設してまいります。

これは正に親の会運動の貴重な成果とあってよろしいかと思う次第、尚又この教育に携わった教師たちの研修組織の形成等、他の教育機関には見られない教育的手法を用いての機関は近ごろようやく言われはじまった「個人差に応じて、それぞれに適切な教育の先取り」をしてきたことになったわけです。

さて、この全国言語障害児をもつ親の会大会が地方で行われるようになったのは、昭和46年の秋田が最初でしたが、次が岐阜大会で、昭和62年の北海道大会以降、1年おきに地方で行われるようになり、ブロックを単位に予定されて来ましたが、今回は全国一周後最初の大会となるわけで、前回は札幌だったのでしたが、平岡さんも元気で、特に北海道が好きな平岡さんただだけ心に残りました。以来16年現会長の土谷さとるさんを中心に再び北海道大会が催されることは、親の会として記念すべき帰郷道になるので、これ又生涯の心に残る大会となることでしょう。

この度の文部科学省が提案している「特別支援教育」では従来の特殊教育の「小・中学校の教育に準じた教育」から「一人ひとりの教育的ニーズに応じた支援を行う教育」への転換により、その策定にあたっては「親の意見を重視する」となっていることから、これからが本当の親の力量が問われる時代がきます。いよいよ親の会の必要性が重視される学校教育への転換をすすめるに当たって、全国親の会の責務の重さを感じるものです。

皆さんのいよいよのご健勝を期待するものです。

略 歴

- 1964年 秋田県言語障害児をもつ親の会設立運動に着手。
言語障害児をもつ親の会全国協議会結成に参画。
- 1965年 秋田県ことばを育てる親の会を結成。会長に就任。
以後39年間秋田県会長。
- 1986年 全国言語障害児をもつ親の会会長。(1991年まで6年間)
- 1991年 全国言語障害児をもつ親の会副会長。東北ブロック長。
(2001年まで10年間)
- 2002年 全国言語障害児をもつ親の会顧問。現在に至る。



< 演題 > 「親と子の絆と思いやりの心=動物の子育てに学ぶ」

< 講師 > 札幌市円山動物園・動物科学館館長 長尾章郎先生

抱負	緑あふれる自然の中で、表情豊かな生き生きとした動物と接することで、その動物が生息する環境の大切さを学び、動物が本当に好きになり、人を含めたすべての生き物を優しくいたわる心が広がる楽しい動物園でありたい。
----	---

動物の子育て	① わが子を認識する方法	1. 視覚…円いものは可愛い 2. 聴覚…卵の中から親との会話 3. 嗅覚…人間より数百倍も
	② 子育て=独立へのアプローチ	1. 母親から学ぶ 2. 集団での育児 3. サルの子育て a. 新生児期（1か月） b. 幼児期（生後1年） c. 少年期（1～3才） 4. サル山の社会生活 ・リーダーの資格

- *（視覚）赤ちゃんは、ヒトも動物もみな可愛い。
- *（聴覚）鳥は孵化30時間前から鳴く。卵の中での親子の鳴き交わし。「刷り込み」現象。
- *子どもが母親の乳首を噛むと、母親はいきなり子ザルの首筋に噛み付く。「うそ噛み」であるが、これで子ザルは自分がしたことの意味を知る。また、「うそ噛み」の意味も理解する。
- *新生児期、母の腕の中は「第二の子宮」
- *子ザル同士の間はすぐ終わる（うそ噛み）→上手な仲直り。

☞ 仲直り下手は一人っ子のせい。家庭の中で、仲直りの機会がない。

生き物から学ぶ	① 人への思いやり	1. 「心の教育」=命の大切さ 2. 代償を求めない愛=アニマルセラピー 3. 人と人とのつながり=喧嘩の後には仲直り
	② 思いやりの心	1. 野生動物の世界 地球上の生き物で人間がいちばん狂暴 2. 人への思いやり 若者の身勝手
	③ 生き物への思いやり	1. 動物園でエサをやる入園者（野生動物にも） 2. クチャロ湖の白鳥おじさん

- * 子供動物園開園当時（昭23年）子どもは2種類だった。
・かわいがる子
・いじめる子
今は、3種類
◇かわいがる子
◇いじめる子
◇子ども動物園に入って来れない子
- * 今の子は、「いじめのサイン」が読めない。
- * 動物にはいじめがない。
- * エサやり。どういう気持ちでエサをやるのが大切。
「白鳥おじさん」～大量の白鳥の「死」を目撃して、これを見過ごすことができなかった。
（文責=梅田）

交流会

ようこそ小樽へ

ことばの教室親の会全国・北海道創立40周年記念大会



大交流会

「心とこころ響き合え 共に喜とう 親の会」

8月2日(土)午後6時から交流会が開かれました。会場は小樽運河添えの倉庫群の一画、「食堂 浅草橋ビヤホール」(倉庫を改造した食堂)です。入り口に陣取った勇壮華麗な潮太鼓の打演でのお出迎えで気分も高まります。

「口とおなかには忙しく、心はゆったり小樽の夜、あしたの元気は今宵から」をモットーに大会実行委員長 高橋えみこ女史のエネルギッシュな挨拶の後、交流会が始まりました。参加人員 269人。秋田県 香川県 宮城県の各位が一緒にテーブル(焼き肉用)で二階席です。階下には、タラバガニコーナー、ジンギスカン肉コーナー、寿司コーナー、ワインコーナー、ビールコーナー、回転寿司コーナー、ソフトドリンクコーナー、その他 果物、オシルコ、そば、ケーキ等のコーナーと盛りだくさんの宴会場です。飲み放題食べ放題です。

中でも人気のあったコーナーはタラバガニコーナーとビールコーナーでした。凄まじいばかりの食欲です。われがちに取り合うあの熱気のような凄まじさにはただ唖然とするばかりです。「ゆっくり語り合いましょう」とはいうものの会場の騒音が激しく隣の人の声が聞き取れません。

「今宵の小樽はあなたのものです。飲んで食べて見て聞いてしゃべって語って六感総てを解放してください。」とは、主催者側の挨拶。まさに挨拶通りの懇親会でありました。

午後9時交流会終了。再び潮太鼓の演奏に見送られて、小樽運河の心地よい涼風に吹かれながら、満足した気持ちを胸に、ホテルへの帰途だったのでした。

次回 2005年の開催県は、静岡県とのことです。

《 山田 》

6



分科会

分科会は、8月3日(日)会場を「稲穂小学校」に移して行われました。稲穂小学校は、昭和42年北海道で初めて「ことばの教室」を開設した学校だそうです。会場校の一般教室は、オープンスペースとなっております。

分科会は、会報第1号でご紹介したように、第4分科会第9部会に分かれて行われました。秋田県親の会会長 辻久視先生は第1分科会(親の会の活動と役割)のアドバイザーとして親の指導に当たっておられました。

分科会の進めかたとしては、「分科会での提言があり、それについて話し合い、アドバイスを受ける。」という進めかたです。

ここでは「教室に通ったOBの方」の提言をご紹介します。 《山田》

第4分科会：ことばのきこえの心配を抱えて
④部会：耳の聞こえのこと

【提言】 私の歩み 札幌きこえの教室 OB 高島 宏美

母と一緒に歩いた道・・・聾学校時代

私は生まれつき耳が不自由でした。いわゆる内耳器官に障害がある両感音性難聴といえます。生まれつき耳の聞こえない私は、聞こえる母や父にどんなに励まされ勇気づけられ愛されてきたのか。そして21年間ここまで歩み続けることができたのか、話したいと思います。

人生を変えたバレーとの出会い・・・小学校時代

小学3年の時、バレーボールに出会いました。バレーを始めてよかったという点は、自分が一步一步人間として成長していくことがわかったことです。

反抗期・・・中学校時代

バレー一筋の中学校生活でした。「勉強しなさい」という親をよそに私は寝てしまいます。本当に親に迷惑をかけたなど、しみじみ反省しています。

親友と過ごした3年間・・・高校時代

バレーをやってきた中でいろいろな人と出会い、人生の何たるかを学んできました。また、親友とも出会いました。

就職につなげるには・・・短期大学時代

短大の授業風景は、高校時代と違って板書することは少なく、講師の殆どがスピーチで指導するというものでした。ここでは講師達に耳のことを打ち明け、勉強にも力が入るようになりました。しかし、そんな日々は長くは続きませんでした。

社会人としての「自覚

現在、銀行で働いています。心の中に一つの信念が生まれています。「障害者である前に一人の人間である」ということです。「耳が聞こえない」だけで殻に閉じこもってはしくない。失敗すること、嫌いなことは多少あるけれど、負けずに何事にも前向きに生きていくことです。



万葉集に収められている歌は、四千五百二十六首である。仮に、一日一首ずつ学習しても十年では果たせない。膨大なものである。「万葉学」という学問的体系ができていくほどである。

私はこの道の研究者ではないので詳しくは知らないが、私が高校時代にその方の尊名と業績を知り畏敬の念を抱いた方がいる。当時大館鳳鳴高校で、教鞭をとっておられた、村木清一郎氏（故）である。

私は、昭和三十一年、大学の教官の研究室で初めて、大著「譯萬葉」を手にする機会を得た。表紙の扉には會津八一の揮毫があり、序文には、佐々木信綱、五十嵐力が、そして、斎藤茂吉が序歌を贈っている。総頁六百二十という圧巻である。限定五百部、非売品である。出版元は、「譯萬葉刊行会（大館市）」である。一個人の研究に多大の出費を惜しまなかった当時の大館市の見識を喜びたい思いであった。（昭和三十年の刊行である）

この「譯萬葉」の特徴を知っていただくために、その内容を紹介します。「原文（本文）」・「訓読」と「口語訳」の三部がセットになっている。よく知られている歌を選んで紹介しよう。

（原文）

渡津海乃
豊成雲尔
伊理比沙之
今夜乃月夜
清明已曾
△卷一▽

（訓読）

わたつみの
とよはたくもに
いりひさし
こよひのつくよ
まさやかにこそ

（村木口訳）

村木 清一郎
譯萬葉のと 梅田信彦

大雲に
海の入日が
さしていて
多分今夜は
よい月夜だろう

*氏の訳は、和歌の持つ「音数律」を守っていることに注意されたい。つまり「対訳」である。

家有者
筒尔盛飯乎
草枕
旅尔之有者

椎乃葉尔盛
△卷一・有馬皇子▽

いへにあれば
けにもるいひを
（くさまくら）
たびにしあれば
しひのはにもる

家に居ると
椀に盛るべき
飯だのに
旅にゐるので
椎の葉に盛る

これは一見簡単な作業に見えるのだが、氏は三十有余年を費やしたと言われる。

諸伝本に当たり、これまでの学界的成果を踏まえ、諸説を参照して本文を校訂し、その上で自説を立て、本文を決定する。その本文に従って訓読を決定し、自らの訳を下す。

この作業が、四千五百十六首に及ぶのである。何しろ、千年以上も経っている作品である。不明な用語や語法も多い。皆一筋縄では行かない。

春過而 夏采良之 白妙能
衣乾有 天之香采山
△卷一・持統天皇▽

はるすぎて
なつきたるらし
しろたへの
ころもほしたり
あめのかぐやま

春が過ぎて
夏が来たらしい
白布の
きぬ乾してゐる
あの香真山に

最後に、巻一「春末の同伴家持」の歌。

新年乃始乃 波都波流能
家布敷流由伎能
伊夜之家餘其臈

（あたらしき
としのはじめの
はつはるの
けふふるゆきの）
いやしけよごと

はつはるだ
年のはじめだ
仕合わせよ
積もれかさなれ
今日の雪のごとく



「なめらかプリン」に挑戦

能代市 納谷 宜直

7月中に、かつてことばの教室で関わった三組の親子と次々と街角でお会いし、思い出話に花を咲かせました。8月10日には、学生時代の千葉の友人が、家族旅行の途中で顔を見せてくれ、8年前に私が特総研での研修の折りに久里浜で会った時のことなどをなつかしく思い出しました。

さて、今年の家族旅行は東京方面へ出かけましたが、パステルというお店の「なめらかプリン」なるものを初めて口にしました。その食感に感激し、能代でも食べられたらなあ〜、と思いましたがそれは無理というもの。それでは自分で作れぬものかとネットでレシピを探したら、ありました。しかもパステルのシェフのレシピです。家庭でも簡単に作れるようにアレンジしてありました。早速二人の娘と挑戦。面倒なこともなく食感も味もバッチリにできあがりました。デザートのリポートリーがひとつ増えた、夏休みになりました。

プロフェッショナル再考

本荘市 鈴木 憲

友人知人、親族に医師がいるが会話の端々に「私達医療の専門家の立場から言わせてもらおうと・・・」と表現されることが多い。

先日、知人である現代の名工(組子細工)が県芸術選奨受章の栄に輝き、祝賀会で「私は職人であるので、更に研さんを積み、腕を磨き良い作品を造りたい」と述べられた。

永年その道に職を奉じ、謙虚さと自信に満ちている方の一言の重みはさすがである。

さて、教育界で堂々と胸を張り、私はプロだ職人だ、子供の問題なら自分にまかせてくれと言える人の少ないのは残念である。

かつて現職のころ、研究授業を終えた瞬間授業の余韻が教室に漂い、その場を去り難くなるような展開をしてくれる先輩や同僚がいて、これがプロの授業だと感心したものだ。

名授業のできる教師の共通点は、人格的に秀れ、プロ意識を持ち、学究的であり、礼に徹し、他人の助言に耳を傾けることができることであった。

もちろん、どの方も保護者から信頼され、子ども達から敬慕され、何よりも表情の素敵なお方だったことが懐かしい。

プロなるためには、現職中にプロ教師何人と同職できたか、公開研究会、

研究授業を何回実践したか、実践の記録や反省をどの位まとめあげたか、そして家族に自分の実践をどれ位話れるかが大事だと先輩から教えていただいたものである。

私には同期友人のグループがあり30有余年兄弟同様の付き合いを続けている。現在は9人のメンバーで年に数回例会を開催している。全員が異業種で、元公務員は私だけである。異業種であるから、どの会員の話題も新鮮で有益、そして若さがみなぎっているのが凄い。

このメンバーが幹事になって今年の4月仙台市で高校同期会を開催、8月には機関誌「満天星(どうたんつつじ)」第4号を発刊した。同期会の席上、友人達数名から「教育のプロ」と初めていわれた。古稀になってようやくプロの足元にたどりついたのである。

心の教室相談員となって

大館市 松本 チエ子

今年は心の教室相談員ということで、中学校に週3回程、通うことになった。

当初、自分の悩みを訴えに来る子などいないだろうと思っていたが、中学生の心の揺れは大きく、一人では抑制できないこともあるようで、あつという間に多くの生徒達が入り出すようになっていく。

いろいろな相談があるなかで、特に人間関係の悩みは友人や親、教師との問題なのでジメジメしていて悩みのレベルも多様である。

そんな教室での取り組みは ①安心できる環境づくり ②生徒の言葉に耳を傾けること ③新しい視点の提供(ユーモアをオブラートに包んで) ④ストレス発散(休息、描画、落書き) ⑤教師、保護者との連携 などである。

間もなく2学期が始まる。「ハマルなよ。」と友達に注意されていたが、冷夏なのに心が熱くなっているところをみるとドウヤラ・・・!?

「森の学校」後日談

秋田市 児玉 文彦

先日、中通小学校の地域の方々との交流会がもたれ、楽しいひとときを過ごすことができた。会の名称は「ザ・フォレスト」で、年2回開催していく所存である。

秋田市の市街地で樹木もたいして多くないのに「なぜ森の学校なの？」といわれ、「人間の森」だと答えたものである。赴任した当時は地域人口が激減しドーナッツ現象が顕在化していた。しかし、伝統校であるがゆえに、

地域住民の意識は隆盛期のそれと少しも変わらないし、教師自身も同様である。

そこで「森の学校」という仮想社会を想定し、「森の住民であればどうだろう」という視点から学校改革を試みたのである。それはメタ認知を高める営みで「戦略」である。

特殊教育も「森の学校」という原点から再考したがゆえに「通級教室」も全校体制で取り組むことができたと考えている。

元気です ～ 私の今日この頃 ～

本 荘 市 柏 原 美 代 子

「Aさん、言語の訓練始めましょうね。……。さあ、このカードは何色ですか。」(Aさん)「……………」 「そうですね。きいろですね。」

入院中の義父に付き添っている私は、隣のベッドのAさんと言語治療士の方のやりとりを聞きながら、「ことばの教室」のことを思い出しています。止しく言えなくとも「そうですね。」とうなずき、正しいことばを語りかける対応のしかたに、「(ことばの教室と)同じだ！」と心の中でつぶやいています。

義父も病気のため発声が難しく、主人の手作りの平仮名表に指をあて意思表示をします。そして今のところ義父の話を一番早く理解できるのは、なぜか嫁の私なのです。

これも、特殊教育に携わりいろいろな子供たちと出会い、かかわることができたお陰と感謝でいっぱい今日この頃です。

続 続 仏 像 を 彫 る



本 荘 市 遠 藤 昌 夫

阿修羅像を彫り進めるにつれて、例えば、片面三臂の付け根の部分には正面側が一本後側が二本に束ねられた状態で脇が造られるのです。つまり、背中と腕二本が直結する形になります。ところが、後側の腕下部の脇を彫っておりますと突然ポカッと穴があいたのです。それは、左右とも同じように穴が開くのです。しかも、その穴が深く完璧に内ぐりしたところと貫通してしまったのです。何故そんな過ちを興したのか原因が分かりませんでした。

【編集後記】

爽やかな秋晴れの日が続いております。会員の皆様にはお元気でご活躍のことと思います。

この度、親の会会長 辻先生、昨年度事務局 淳城第二小学校のご配慮により言語障害児を持つ親の会全国大会小樽大会に出席させて頂きました。

札幌円山動物園 動物科学館館長長尾章郎氏の記念講演がありました。講演の中で「野性動物には餌を与えないでほしい」とのお話がありました。

〔今、旅行者の中で狐に餌を与える人がいる。狐は人間の臭いが分かって車が来ると道路に飛び出して餌を貰おうとする。だから、狐は自分で餌をとることをしなくなった。狐は1頭で野鼠年間 600匹 捕獲する。10頭で6000匹、狐100頭いると野鼠 60000匹 捕獲することになる。

狐が鼠をとらなくなったので鼠による農作物の被害、森林の破壊が目に見えて増えてきた。野性の生き物には人為的な餌を与えないことが生き物への思いやりであり、ひいては人間の生活被害、自然破壊もくい止めることができるのだ。(P5参照)〕 熊と人間。鳥と人間。白鳥と人間。いろいろな野性動物と人間とのかかわりやつながりを考えさせてくれる講演でした。

第2号は親の会全国大会の概要が主な内容になりました。このほか、8月中には秋田県聴覚・言語障害教育研究会も開催されたのですが、その内容記録は次号で報告いたします。

第1号 第2号 MEMORIAL HALL 2003へのご寄稿下された先生方誠に有り難うございました。

《文責 山田 芳男》



～ 秋 祭 り ～

《イラスト
梅田 信彦 氏》